

大正大学公共政策学科3年生の NPO・団体・企業での インターンシップ型実習の取り組みについて

～2024 年度の実習学生の事例から～

本田 裕子

大正大学 地域創生学部 公共政策学科 教授

(要旨) 大正大学公共政策学科は、公共政策の現場での学びを重視していることから、秋学期(第 3Q)に実習科目「フィールドワーク」(公共政策実習)を開講している。3 年生の実習では、最低 80 時間の実務体験を主としたインターンシップ型の実習を行うことになる。実習先は、公務員を志望する場合は自治体、それ以外の場合は本人の所属するゼミナールの関心領域に関連した NPO・団体・企業等を想定しており、2024 年度の履修者 80 人の実習先を整理すると、自治体の役所 26 人、議会事務局 1 人、NPO・団体(企業含む) 51 人、学内実習 2 人となった。本報告は、自然環境保全のゼミナールに所属する学生の NPO・団体・企業での実習として 8 事例を実習先からの評価も併せて紹介する。3 年生実習は学生の積極性や主体性が重要となり、実習先の情報収集も早くから必要となる。次年度以降も当該実習を引き続き実施することとする。

キーワード: インターンシップ型実習、NPO・団体・企業、自然環境保全、大正大学公共政策学科

1. はじめに

大正大学公共政策学科では、公共分野をめぐる諸問題をさまざまな学問アプローチから取り組むことを特徴としている。中でも「フィールドワーク」¹という実習科目を開講し、「現場での体験」からの学びを重視している。

公共政策学科は 2020 年度に設置され、2024 年度で 5 年目を迎えた。2024 年度は、1 年生は豊島区をフィールドとした実習、2 年生はグループごとの宿泊型実習として、山形県新庄市、山形県長井市・飯豊町、宮城県栗原市、宮城県南三陸町、新潟県長岡市、岐阜県飛騨市、京都府京都市、兵庫県神戸市・姫路市をフィールドにそれぞれの地域の特徴・課題を生かした実習を行った。また学

科には体育会に所属する学生も一定程度在籍していることから、試合等に参加できるように 2 年生は対象者向けの特別実習プログラムも行った。

1 年生や 2 年生の実習は教員引率となるが、3 年生は、ゼミナール教員の指導の下で、将来の希望する進路や学びの関心領域をふまえて、学生 1 人 1 人がインターン型実習に取り組む設計をしている。

これまで『地域構想』では 3 年生実習科目である「フィールドワークⅢ」が開講された 2022 年度から毎年報告を掲載している。学生たちの実習紹介も含んでおり、2022 年度は 9 つのゼミナールからそれぞれ学生たちの実習内容が報告されている(本田 2023)。2023 年度は、公共政策学科が公務員の人材輩出も主眼にしていることから、自治

¹ 2024 年 4 月から改組により、公共政策学科は地域創生学部に配置された。カリキュラム運営上は大きな変更はないが、実習科目名が「公共政策実習」となる。したがって、2024 年度は、1 年生は「公共政策実習Ⅰ」(再履修等の社会共生

学部所属の学生は「フィールドワークⅠ」として履修)、2 年生は「フィールドワークⅡ」、3 年生は「フィールドワークⅢ」を開講した。

体で実習に取り組んだ学生たちの紹介を報告した（本田 2024）。本稿では、2024 年度の「フィールドワークⅢ」について、その概要と NPO・団体・企業で実習に取り組んだ学生たちの学びを紹介する。

2. 2024 年度の実習について

（1）概要

実習では、職場体験・就労体験を通じて、実習先に関連するテーマについての現状把握や課題解決に向けた視点を学ぶ、すなわち、インターンシップ型学習を企図している。実習のテーマとしては『公共政策』に関する諸課題の様相を実態に応じて把握する」と設定し、具体的には、自治体の諸施策、公共サービス、まちづくり、観光振興にかかわる諸課題の様相を、実態に応じて把握すること、念頭においている。そして、実習を通じて、自身の公共政策分野での学びを深化させることをねらいとしている。前述のように、3 年生の実習では教員は引率せず、原則 1 人 1 人が職場体験・就労体験を通じて、実習先の地域や実習先のテーマの理解を深め、課題発見や仮説検証を行うことになる。ただし複数の学生を受け入れてくれる場合は、複数人の学生となる。

3 年生の実習は、「事前学修」、「実習」、「事後学修」の大きく 3 つに分かれる。実習は、最低 80 時間（1 日 8 時間×10 日間を想定）を設定した。実習にあたっては、交通費・宿泊費の補助として実費の上限 7 万円までは大学から補助が出る。

学生には、2024 年 4 月 8 日、6 月 3 日、7 月 22 日にゼミナールの時間を使って全体ガイダンスを実施し、実習の概要、スケジュール、費用等について説明をした。学生たちには、8 月上旬までに実習先を確定させる必要があることを伝えた。検討にあたっては、3 年生は全員ゼミナールに所属しているので、担当教員と相談の上で決めていくこととした。秋学期に 3 年生に進級する学生については、実習に参加するか否かの確認を 7 月から 8 月にかけて行い、参加を希望する場合は実習先の相談を所属予定のゼミナール教員と相談の上決めることにした。

実習先は原則学生本人の希望が前提となるが、

希望先から受け入れができないという回答も当然想定される。また、交渉での先方の混乱を避けるため、自治体での実習を希望する場合は、学生が交渉をせずに、原則学科事務が先方との交渉にあたった。最後まで実習先が決まらない学生が複数人出てくるとも想定し、学内での実習先の確保、集団研修の検討・確保も 4 月から 8 月まで行った。集団研修としては例えば 2024 年度は日本テーマパーク開発株式会社の協力をいただいた。

（2）学生の実習先について

2024 年度の実習の履修者 80 人の実習先は、17 自治体の役所 26 人（首都圏の 9 自治体 14 人、非首都圏の 8 自治体 12 人）、議会事務局 1 人（茨城県取手市議会事務局 1 人）、NPO を含めた団体・企業 51 人、学内実習 2 人とした。なお、非首都圏自治体のうち、3 自治体（5 人）の実習は東京事務所での実習も含まれている。学内実習としては大学図書館の協力を得て、図書館業務の補助等に携わった。

（3）第 3Q の展開について

2024 年度秋学期（第 3Q）は 9 月 24 日～11 月 10 日となり、事前学修・実習・事後学修の 3 つに大きく分かれる。事前学修は 9 月 25 日～9 月 27 日、実習は 9 月 30 日～11 月 1 日のうち最低 10 日間とし、事後学修は 11 月 4 日～11 月 11 日、11 月 7 日は学内で実習報告会を行った。実習は前述のように最低 80 時間（1 日 8 時間×10 日間）としているので、例えば実習先によっては 1 日の実習時間が短い場合もある。その際には合計で 80 時間になるように実習日を増やすといった対応をお願いした。

まず 9 月 24 日には、公共政策学科 1 年生～3 年生が参加する「出発式」を午前中に開催した。午後は実践女子大学教授の吉田雅彦氏の講演会「地域でのフィールドワークの心構え・理論・手法」を開催した。9 月 26 日～29 日は学科教員によるビジネスマナーに関する講義、キャリアセンター職員から実習とキャリア形成に関する講義等を行った。25 日午前には、大正大学地域構想研究所の片山善博所長による特別講義を行った（図-1）。外部のゲスト講義は、26 日午前にも墨田区、江東区、

葛飾区、足立区、江戸川区の人事担当者による、区の説明を含め、自治体職員について説明いただいた(図-2)。同日午後は JICA 職員による JICA を含めた国際協力の意義を、青年海外協力隊経験者による体験を中心にお話いただいた(図-3)。



図-1 特別講義(質疑)の様子
(2024年9月25日筆者撮影)



図-2 自治体職員による講義の様子
(2024年9月26日筆者撮影)



図-3 JICA 職員による講義の様子
(2024年9月26日筆者撮影)

実習日程は実習先との調整でそれぞれが決まる。実習期間中は、学生は毎日日報を作成し、当日夜23時59分までにゼミ担当教員にメールや学内LMS

等で提出し、フィードバックを含めたやり取りを行った。実習が終わり次第、報告書について、ゼミ担当教員の指導の下取り組むこととした。なお、実習期間である10月には、所属するゼミナール担当教員が課す課題に取り組むという課題を課した。例えば筆者の担当する自然環境保全をテーマにしたゼミナールでは、課題本と現地見学の2つを課した。前者は宮内泰介著『人びとの自然再生 歩く、見る、聞く』(岩波新書)とし、事前に提示したワークシートを完成させる作業となる。後者は2024年10月19日・20日に井の頭自然文化園で開催される「ヤマネコ祭」あるいは別の動物園での見学の様子をレポートにまとめる作業とした。

事後学修は、報告書の作成・提出とともに、報告書の内容をふまえた報告会に向けた発表準備を行った。報告会は2つのゼミナールごとに4教室に分かれて、学生1人あたり発表7分、質疑3分でPowerPointを用いての実習報告を行った(図-4)。



図-4 事後学習：報告会での発表の様子
(2024年11月7日筆者撮影)

(4) 成績評価について

成績評価について、事前学修での課題や実習期間中の日報、事後学修である報告書の採点をゼミ担当教員が行い、報告会の採点についてはゼミ担当教員と報告会の同教室の教員の合議により評価を行った。また、実習先からも学生の主体性や報告・連絡・相談がきちんとできていたか等についてコメントをもらう形でフィードバックをいただき、成績評価に反映させた。

3. 実際の実習について～8 人の学生の事例から

ここでは、自治体での実習がどのようなものであり、実習を通じてどのような学びがあったのか、紹介したい。筆者の担当するゼミナールに所属し、自治体以外の団体で実習をした学生たち 8 人の実習内容を取り上げる。文章はそれぞれ学生たちに寄稿してもらった。



図ー5 学生が作成した資料

(実習学生提供)

(1) 学生 A:公益財団法人日本生態系協会

自然環境の保全に興味があり、NPO・団体での実習を希望していたことから、学科教員から紹介を受け、日本生態系協会の生態系研究センターで実習を行うことができた。実習では、利根川中流部での生物調査や「関東エコロジカル・ネットワーク事業」の手伝いとして「ジャパンバードフェスティバル 2024」の運営準備を経験した。

「関東エコロジカル・ネットワーク事業」では、地域の自然と人々の活動をつなげる重要性を学び、コウノトリ保護のための環境整備が地域全体の生態系保全と経済活性化に寄与することを理解した。大学のゼミ活動で経験していた環境配慮型栽培米の体験を通して、コウノトリの生息地を支える環境づくりが持続可能な農業と直結していることを実感できた。

コウノトリの保護への理解とその重要性を伝えるため、「ジャパンバードフェスティバル 2024」では、ポスターやPR 資料を作成した(図ー5)。また、来場者へのアンケート調査を実施することで来場者の自然保護への意識向上に努め、コウノトリの保護活動や生態系の重要性について多くの人に理解を深めてもらうことができた。結果、「コウノトリ・トキの舞う関東自治体フォーラム」として最優秀賞を受賞するなどの成果もあり、活動に貢献できたことに達成感を感じることができた。

卒業研究では「ビオトープの生き物と人との関わり」をテーマに、さらに知識を深め、地域の自然環境保全に貢献していき、今後もエコロジカル・ネットワークの形成に積極的に参加し、持続可能な社会の実現に向けて活動していきたい。

(2) 学生 B:NPO 法人グリーンワークス

都市で取り組まれている緑化活動や自然環境保全に興味があったことをきっかけに、緑を増やす団体にて実習をしたいと思い、インターネットで検索をかけたところ、団体のHPを見つけた。活動内容の充実さに関心を抱き、実習の受け入れをしていただけるように問い合わせをして、面談を経て承諾を得た。実習場所は都内の複数の公園を中心に行った。

実習内容から1つ取り組みを紹介すると、府中市内にある公園(紅葉丘中央公園、懸垂公園)にて、役所や地域のボランティア団体が主催し、グリーンワークスのスタッフが講師を務める「ガーデニング講座」の運営補助に携わった。この講座では、ガーデニングにまつわる植物の育て方や花の剪定等を学べることができる。

団体の活動として、誰か1人がリーダーとなって活動を推進していくのではなく、「みんなで考えて、作り、楽しむ」ことをモットーに活動していることが印象に残った。何より、ガーデニング活動を通じて、地域コミュニティの場を形成するという、地域づくりにも貢献する「コミュニティガーデニング」を学ぶことができた。今後の展望としては、卒業研究にて、コミュニティガーデンの形成を、地域づくりだけではなく、生物多様性保全の視点からも調査したいと考えている。

(3) 学生 C:NPO 法人海さくら

海岸ごみの問題に興味があったことからインターネットで情報を収集し、神奈川県藤沢市にある

江の島や片瀬東浜海水浴場を活動拠点としている団体を見つけた。実習の受け入れをしていただけるように問い合わせをして、面談を経て承諾を得た。この団体は、2005年から「目指せ！日本一楽しいゴミ拾い！」を合言葉にビーチクリーンを行い、江の島に「かつて生息していたタツノオトシゴが戻ってくるぐらい海をキレイにする」という目標をかかげ、体験・体感を大事にし「楽しく」「楽しめる」活動に取り組んでいる。

実習ではさまざまなゴミ拾い活動に参加したが、主に「PIG FES 2024」のゴミ拾いイベントに携った。「PIG FES」とは、みんなが平和で安心安全に楽しめる海や浜を目指すイベントのことであり、ビーチクリーンで海や砂浜をキレイにした後は、障がいのある方もない方もだれもが楽しめるよう工夫されたスポーツやワークショップが体験できる。今回のイベントでのゴミ拾い活動への参加人数は998人となり、1袋35L換算で、可燃ごみが61袋、不燃ごみが8袋、ペットボトル3袋、傘2本、ビン数本を集めることができた。

ゴミ拾い活動はつまらなくて面倒くさいものと考えられがちであるが、海さくらでの実習を通じて、ゴミ拾いは工夫をすれば楽しくて面白いものになることを学ぶことができた。私は学内サークルの「環境サークル smile」に所属しているので、楽しくゴミ拾い活動をしながら、ゴミ問題を含めた環境問題について考える機会を増やしていきたいと考えた。また、サークル活動だけでなく、各地で開催されているゴミ拾い活動にも参加していきたい。

(4) 学生D:おきのえらぶ島観光協会

実習では、鹿児島県沖永良部島の「おきのえらぶ島観光協会」でサステナブルツーリズムを学んだ。実習地を選んだ理由は、過去に訪れた離島での自然体験を通して、離島でのサステナブルな観光に興味を持ち、そのテーマを深めていきたいと感じたことがあるからだ。インターネットで情報を収集し、実習の受け入れをしていただけるように問い合わせをして承諾を得た。実習期間は10月2日～10月11日の10日間となる。

実習ではさまざまな経験をした。まず観光協会

の業務では、地元の高校生が島の観光プランを考える授業を見学した。また、実際の観光ツアーに同行した。「観光に関する対談」という企画では、農業衰退やオーバーツーリズムの課題、観光が地域活性化に果たす役割を学んだ。「コーヒー農園ツアー」では、無農薬栽培や独自の焙煎方法に触れ、資源を無駄にしない価値観に感銘を受けた。

「ビーチグリーン活動」では、住民の方々と一緒に漂着ごみを拾い、世代を超えた環境保護活動を体験することができた。「廃プラスチックのアップサイクル体験」では、プラスチックのリサイクル事情と持続可能な社会への取り組みの重要性を学ぶことができた。

今回の実習での学びを通して、サステナブルツーリズムは、観光に関わる全ての方が価値を見出し、環境への責任や持続可能性を考えていることを学んだ。このような視点を就職活動や卒業研究で活かしていきたい。

(5) 学生E:NPO 法人夏花

人と自然との関わりについて興味があり、自然豊かな沖縄で人々はどうのように自然と関わってきたのかを知りたいと思い、沖縄県石垣市白保にあるNPO法人夏花（なつばな）を実習先として希望した。

実習日程は、2024年10月15日から10月28日の内、計10日間であった。実習では主に、サンゴ礁保全の活動に携わった。団体では、畑の周りに月桃という植物を植え、サンゴ礁の破壊の原因の一つである赤土の流出を防ぐ、という月桃グリーンベルト大作戦を実行している。育てた月桃の根や葉を活用してルームフレグランスや月桃茶を作成して商品を販売しており、月桃を植える作業から商品を作るまでの過程を手伝った。また、団体の事務所がある「しらほサンゴ村」で毎週日曜日に行われている、地域特産品の販売を促進することを目的とした白保日曜市の設営準備などを行った。

今回の実習を通して、自然環境や文化の保全にはその地域に住む人々との関係をまず考える必要があることを学んだ。ただきれいだから守るべき、伝統があるから守るべきといった表面的な理由だ

けではなく、集落の人々の様々な思いがあることを忘れてはいけないと感じた。卒業研究でも生かしていきたい。

(6) 学生 F: NPO 法人きよセラボ

地域活動に興味があり、1 年次から東京都清瀬市を中心に活動する当団体で社会教育・地域課題に向けた活動を行っていた。2 年次の夏休みに新潟県佐渡市の方々との交流活動に参加し、佐渡市の環境や文化、地域問題に興味を持った。そのため、今回の実習先に希望し、団体の代表に相談をして、承諾を得ることができた。実習は 10 月 2 日～14 日、22 日～29 日を見新潟県佐渡市、16 日～19 日を東京都清瀬市という日程で実施した。実習スケジュールが通常よりも長くなっているが、指導教員の許可を得た上で取り組んだ。

新潟県佐渡市内の活動では、交流関係人口へのアプローチのため、当団体が所有する古民家の修繕作業や近隣の宿泊施設で使用されていない部屋の修繕作業を行った他、地域おこし協力隊の方に同行し、トキを含める自然環境保全に関わる活動に参加した。また、佐渡の文化を学ぶために、新穂潟上地区で活動されている方のご厚意で「鬼太鼓」への参加や日本財団の子ども第三の居場所事業に関わる施設「こども未来舎りぜむ」でのボランティア活動にも参加した。

本実習を通じて、佐渡市内の空き家問題と新穂潟上地区の地域文化への関心が高まった。卒業研究では、トキの野生復帰と新穂潟上地区の文化について調査したいと考えており、今後佐渡市での調査を予定している。また、卒業後は、佐渡市の地域おこし協力隊を希望しており、佐渡市の空き家問題や交流関係人口増加に取り組んでいきたい。

(7) 学生 G : 株式会社野田自然共生ファームおよび「こうのとりの里」

千葉県野田市にゼミ活動（環境配慮型の稲作体験作業）を通じて、2024 年 4 月から定期的に訪問していたこともあり、学科教員の紹介を得て、野田市の第三セクターである株式会社野田自然共生ファームと、隣接して野田市が管轄しているコウノトリの飼育施設「こうのとりの里」の 2 か所で

実習に取り組んだ。

野田自然共生ファームは、農業と自然の共生を目指した地域づくりに取り組んでいる。実習では、施設の紹介や共生ファームの取り組みについて説明を受けた後に、作業として、草刈りの重要性の説明を受けた後に、草刈り機（ブルモア）に乗って農道や田んぼ周辺の草を刈る作業に取り組んだ。そもそも草刈りの意義としては、農業環境の維持に加えて、近年出没するようになったイノシシの生息環境になる可能性をなくすことがある。イノシシはコウノトリの餌となる昆虫類を捕食するので、農地の草刈りはコウノトリの餌生物を増やすことにもつながることを理解できた。草刈りのできない雨の日は、農機のメンテナンス作業を行った。トラクタのアタッチメントの交換やチェーンの目立て作業、農機に潤滑剤を塗る作業に携わることができ、貴重な体験となった。

「こうのとりの里」では、まず、飼育員から館内案内や野田市がコウノトリをシンボルにしていることについて説明を受けた。実習としては、飼育ゲージにいるコウノトリにエサをつくる作業を行った。ドジョウや凍らせたワカサギをバケツに入れて計量し、ワカサギの口内にはピンセットでビタミン B の薬を投与する作業も行った。他には、館内の応対や清掃も行った。

コウノトリの野生復帰の取り組みは、大学での講義やゼミ活動を通じてある程度理解していたが、実習を通じて理解を深めるとともに、野田市の地域活性化につながっていることを理解することができた。今後は卒業研究に向けて、野田自然共生ファームが行っている「市民農園」の認知と参加率向上の方策を考えていきたい。

(8) 学生 H: 日本テーマパーク開発株式会社

もともと関心を持っていた分野での実習先を見つけることができず、学科教員に相談した結果、学科で広く希望者を募っていた日本テーマパーク開発株式会社での実習に参加することとなった。期間は 2024 年 10 月 4 日から 10 月 16 日までの 12 日間で、そのうち 2 日は休みというスケジュールであった。実習には、私以外にも同じ学科から 6 人の計 7 人で実習を行うことになった。また、

実習先には他大学からの実習学生もいた。

実習先は、日本テーマパーク開発株式会社が運営している「那須ハイランドパーク」（栃木県那須町）となり、店舗運営や接客などを行うといった実習内容であった。私が配属されたのは、テーマパークの中でも特に多くのお客様が行き交うエリアにてチュロスやポップコーンなどといった軽食を提供する屋台での業務であった。また、実習先の社員の方から事前に目標売上金額が伝えられており、それらを達成させるために様々な取り組みを行うという形で実習が行われた。配属された店舗では新たにPOPをいくつか作成し、既存商品に工夫して新たな商品を作るという取り組みを行った。

実習を通じて、日本テーマパーク開発株式会社が取り組んでいる業務についてだけでなく、何事にもチャレンジすること、仲間同士のコミュニケーションの大切さを学ぶことができた。

4. 実習をふりかえって

(1) 実習先からの評価

3年生実習では、実習先からの評価も成績評価に含めている。本稿で紹介した学生たちの実習先からの評価がどのようなものであったか、自由記述部分を実習先・学生が特定されない形で紹介したい(順番は前述の学生の紹介順ではない。一部、文意を損ねない形で修正した部分がある)。

●自ら進んで積極的な姿勢で課題に対応し、よりよくする提案もあって、非常に優秀な学生です。また、実習としての作業参加を認識し、自身が携わる作業の背景にある意味を質問するなど、理解に努める態度に感心しました。コミュニケーション能力も高く、職場の人とも打ち解けて実習していました。今後の活躍に期待しています。

●地域課題への目の向け方が誠実でとても好印象でした。積極的にコミュニケーションを取り、いろいろな意見を交わされていたように思います。今の自分の立場で〇〇の助けになるにはどうしたら良いか、こんな解決方法はどうか等、様々なア

イデアを出してくださいでしたが、ただ思い付きでアイデアを出すだけではなく、「これは迷惑になるのではないか」など配慮ある視点もあり、優しいお人柄を感じました。今後も無理ない範囲で関わってもらえたら嬉しいです。

●現場で対応したメンバーからのコメントを、そのまま転記しておきます。

- ・現場が変わり、相手が変わる現場でも、臨機応変に対応して、嫌な顔一つせずにより切り、たくましさを感じました。
- ・周りの様子を見て、機転のきく行動、一緒に取り組むものとして、とても助かりました。そして笑顔がいつも素敵でした。
- ・初めての現場、多種多様な人たちの中であって、自然に溶け込むコミュニケーション能力の高さ。また、臨機応変に動ける判断力と行動力もありました。
- ・ほぼ全員年上の集団の中にも、自然体でいられる適応力と、その場その場を楽しむことができる余力もあるのが素晴らしいと思いました。

●私から実習についてアドバイスいたしましたが、本人自ら周りに知りたい事を積極的に聞き、コミュニケーションも良くとれ、感心いたしました。

●挨拶・時間厳守・報告など基本的なことがまろしっかりとできていました。明るい笑顔と笑い声が雰囲気をよくしてくれました。積極的に物事に取組み、自分の意見もしっかりと持った素晴らしい学生でした。短い期間でしたが、我々にとって素敵な大切な仲間となりました。ありがとうございました。

●全体的な評価としては高評価とする。指示した業務終了後には積極的に次の指示を仰いでいた。外での業務についても暑い中ではあったがよく頑張りました。残りの学生生活、就職等も頑張って過ごしてください。

●基本的に、ハキハキとした口調できちんと意見

を述べることができ、それに伴って提案する力があつたように思います。自分自身の気づきを大切に、より多くの人からもそれらについて共感が得られるよう説得材料を丁寧に集め伝えられると、より納得感のある提案になると思います。また、自身の気づきのみならず、他の意見についても傾聴・理解の上で自分の中にきちんと落とし込むことができると、その意見をオリジナリティ溢れる新たな提案として創り上げることができ、提案する角度も広がるようになるかと思います。今後とも様々な課題や他方の意見に触れ、この力をより伸ばして頂けることを期待いたしております。

●様々な人、団体と連携し活動していただきましたが、いずれにおいても良い評価が返ってきました。積極的に発言、行動を行い、能動的に活動できていたところを高く評価しています。

いずれの学生も実習先からの評価は高いものであった。これらの実習先の評価から共通しているのは、「積極性」や「主体性」といえる。これは挨拶といった基本的なコミュニケーションだけではなく、実習そのものへの姿勢を意味するだろう。3年生実習は、教員が引率しないので、実習がよいものになるかは学生の取り組み意欲にかかっているともしえるし、実習の現場では状況に応じた柔軟な対応も必要となる。そのような状況にも適応できる姿勢も求められる。

また本稿で取り上げた学生も一部含まれているが、実習先からの自由記述では、今後に向けた学生へのアドバイスも記載されていることがある。このようなアドバイスは、当該学生はもちろんであるが、全体へのフィードバックとして生かしていくことが重要といえる。

(2) 学生たちの今後の学びとのつながり

3年生実習はインターンシップ型であるので、学生たちのキャリア形成に大変役立つことを企図しているが、彼らが取り組む卒業研究にも役立つことも当然企図している。筆者が担当する自然環

境保全をテーマにしたゼミナールでは、「自然環境保全」がそもそも座学だけではなく、現場での学びを重視しており、卒業研究についても現場でのデータ収集を重視している。

本稿で紹介した8人については、公務員志望ではないことから、学びの深化を第一目的に、自分の関心のあるテーマで実習先を調べるように指導した。本稿で紹介した8人のうち、卒業研究を意識して実習先を選んだ6人は実習を経て、その分野の理解を深め、実習先に関するテーマを卒業研究として設定することになっている。残りの2人について、1人は実習先のテーマに直結はしないが、実習先で訪れた場所に着想を得たテーマとなっている。もう1人については、そもそも希望するテーマでの実習先を確保できなかったことがあり、実習先に直結するテーマではないが、実習がキャリア形成においては役立つ経験となっている。

実習を今後の学びに結びつけるためには、学生が自分の関心のあるテーマの実習先としてどのような団体があるのかを調べるのがまず重要である。そして、ゼミナール教員の指導の下で希望する団体を選定し、実習受け入れの問い合わせをして、受け入れてもらえることが必要である。テーマによっては適当な団体がない、あるいは団体によっては受け入れが難しいという状況もある。できるだけ早くに希望する団体を複数選定する、という作業が大事になってくる。

公共政策学科では2020年度に改組により設置された比較的新しい学科となる。4年生には卒業前の1月に「卒業アンケート」を実施しており、その中で、最も満足した学びを質問した結果、2023年度(1期生)、2024年度(2期生)とも「フィールドワークⅢ」が最も多く選ばれている²。フィールドワーク自体が本学科の大きな特徴であるが、その中で3年生実習は大きな役割を担っているといえる。本稿では自治体実習については取り上げなかったが、2024年度の卒業生の進路として、公務員に進むことが確定した学生は卒業予定者88人中13人(国税専門官1人、自治体10人、警察2人)である。彼らの多くが3年生実習では自治

² 2023年度調査では49.5%(回答者107人)、2024年度調査

では50.0%(回答者84人)である。

体での実習を経験しており、公共政策の最前線を担う人材育成にこの実習が役立っていることも窺える。

今後もキャリア形成や学びの深化に役立つ実習の設計、運営に学科として取り組んでいきたい。

5. 付記

学生たちの実習を引き受けていただいた、すべての実習先の関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。また、実習実施にあたってご尽力いただいた大正大学の関係する各部署の皆様にも感謝申し上げます。

本報告の執筆にあたり、実習について情報提供

に協力してくれた学生（五十音順：内山晶未氏、小平海人氏、成平昌駿氏、高良美月氏、米山綾音氏、太田暖菜氏、篠田慎之介氏、丸田瞳悟氏）に厚く謝意を表します。そして、公共政策学科「フィールドワークⅢ」担当教員である先生方（鵜川晃先生、江藤俊昭先生、柏木千春先生、首藤正治先生、高瀬顕功先生、高橋正弘先生、塚崎裕子先生、村橋克則先生）には、3年生の実習を展開していく上で大変お世話になりました。まことにありがとうございました。

最後に、実習にあたって事務作業および学生対応の諸々にご尽力いただいた、学科事務の助手佐々木恭子氏、助手石井香凜氏、助手森恵美子氏、にもこの場を借りて感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 本田裕子：2022年度の大正大学公共政策学科3年生のインターンシップ型実習の取り組みについて，地域構想，Vol. 5，pp. 108-117，2023.
- 2) 本田裕子：大正大学公共政策学科3年生の自治体でのインターンシップ型実習について ～2023年度の取り組みから～，地域構想，Vol. 6，pp. 88-96，2024.